出題分析		
試験時間 70 分	**配点** 100 点	**大問数** 2 題
分量（昨年比較）〔減少 [同程度] 増加〕		**難易度変化**（昨年比較）〔易化 [同程度] 難化〕

【概評】

大問数は例年通り 2 題。大問Ⅰが主に国語的出題，大問Ⅱが主に数学的出題である点も近年の傾向通り。昨年と比較して，設問総数の減少，記述の増加といった形式上の違いはあったものの，総体として昨年と同じ程度の分量・難易度であり，大問Ⅰ・Ⅱを通じて慶大受験生であれば満点近くを目指せるはずの内容であった。20～30 字の論述問題が 4 問あったが，いずれも大まかな解答の方向性は見いだしやすい。一方で，大問Ⅱの計算問題への対処が明暗を分ける大きな要因になっただろう。大問Ⅰ・Ⅱとも，本文は趣旨や流れを比較的把握しやすい内容と言えた。

設問別講評

問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
Ⅰ	言語学習と対称性バイアス （本文は，今井むつみ・秋田喜美『言葉の本質：ことばはどう生まれ，進化したか』中公新書，2023 年，を改変して作成。）	人間と動物の学習のあり方の違いに着目し，言語獲得のための条件（＝対称性バイアス）について考察した文章が題材。問 1 の(9)(10)は，「突然変異」との対比，「徐々に」との整合から「連続的」。問 2 の(A)には「だが」も入りそうだが，(B)に入るので不可。また(D)には「おそらく」も入りそうだが，次の文の末尾が断定調なので「もちろん」が適切。問 3 の(イ)は，本文冒頭 3 文目「名前というのは，形式…と対象…」の表現などを踏まえて選ぶ。「記号」も「形式」も入りうる。問 4 は字数制約の厳しさ，記号への言及，本文と重複しそうであること，などが迷いやすい要因であった。問 5 は下線部(b)がある次の段落の内容を整理して記述する。問 4 も問 5 も，的確な内容の答案を作成するのは難しくとも，部分点は得ておきたいレベルの記述問題であった。	やや易

設問別講評			
Ⅱ	消費期限と賞味期限（本文は，村上道夫・永井孝志・小野恭子・岸本充生『基準値のからくり』講談社，2014 年，を改変して作成。）	「消費期限」と「賞味期限」の違いや問題点などをめぐる文章が題材であり，両者を混同せずうまく整理して読んでいく必要があった。また高得点のためには計算問題への対処が肝要と言え，数学の得意・不得意で難易度の印象は大きく変わったと考えられる。問 1 は先入観を捨て，本文を忠実に読んで整理する。問 2 の計算問題では差が付いたと思われる。(22)(23)については，2^{50} の値を求める膨大な筆算が必要なようにも思えるが，与えられている $2^{10}=1024$ を 1.024×10^{3} と置き換えるなど，うまく使うことで大まかな桁数を計算できた。また数学が得意でⅡＢの範囲まで履修していた受験生であれば，対数計算や二項定理などを活用して桁数を求める方法もあった。問 4 は，「消費期限のような賞味期限をもつ卵」「賞味期限のような消費期限をもつ生野菜サラダ」の両事例を総括した，本文最終段落の内容をまとめる。問 5 は，「消費期限」の通常の決まり方，「賞味期限」の通常の決まり方の対比を踏まえた上で，指定字数内にまとめればよい。	標準

合格のための学習法
近年，大問Ⅰで「国語的」な，大問Ⅱで「数学的」な内容が扱われるパターンが概ね定着している。ただし「論文テスト」の出題傾向は前年から突然大幅に変わることも多いので，前もって模試などで様々なパターンに触れ，対策を練っておく必要がある。代ゼミ作成の「慶大入試プレ」では引用書籍の「的中」例も多いので活用は必須（模試の数年後の入試だが梶井厚志『戦略的思考の技術』や，引用箇所は異なるが同じ年度内の模試と入試で使われた竹内啓『偶然とは何か』など）。精読・多読の力を伸ばしつつ，同時に「確率・統計」「集合・論理」および「桁数の大きい数を計算するための工夫」など，数学の力も伸ばす勉強をしていくこと。また日頃の幅広い読書の習慣が結果に直結するので，積極的に経済学・政治哲学・科学技術論・行動経済学・リスクや安全管理論などの話題に親しむようにし，さらに情報科学・コンピュータ科学・人工知能研究などの基礎的な考え方にも触れておこう。